

平野勝巳先生を悼む

プラスチックリサイクル化学研究会 会長 加茂 徹

プラスチックリサイクル化学研究会の幹事を務めて頂いていた日本大学の平野勝巳先生が、3月15日に逝去されました。当会会長として慎んでお悔やみ申し上げます。

平野先生は、1981年に神戸大学をご卒業された後、住友金属工業株式会社で当時国家プロジェクトであった石炭液化研究に従事され、その後日本コールオイル株式会社を経て2001年に日本大学の理工学部へ移り、2008年に教授に就任されました。私も当時同じ石炭液化を研究していたので、石炭液化の実用化に関する優れた研究結果を学会で精力的に発表されていたことを良く覚えております。特に1994年に米国のニューメキシコ州のアルバカーキーで開催された日米合同会議では、共に日本側代表として研究成果を発表し、年齢が近いこともあり大変親しく交流させて頂きました。また日本大学へ移られてからは、石炭液化技術をプラスチックのリサイクルへ応用するといった研究の方向性が重なっており、先生の研究を非常に参考にさせて頂きました。

当会は発足して日が浅く、これからますます平野先生のお力をお借りしたいと考えていた矢先の訃報で、大変驚き残念に思っております。当会に対するこれまでの平野先生のご協力に感謝して、心よりご冥福をお祈りします。

平成 27 年 4 月 6 日

プラスチックリサイクル化学研究会 会長 加茂 徹

平野勝巳教授を悼む

日本大学 名誉教授 真下 清

平野勝巳教授は平成 27 年 3 月 15 日に 58 歳で急逝しました。3 月 18 日午後 6 時頃自宅の電話が鳴りました。平野研究室の角田助教からでした。研究室から滅多に電話がかかることはないのに、少々不安を覚えました。角田君に「研究室で事故でもあったのか」と問うたところ、まったく思いがけない応答がありました。「平野先生が亡くなりました」。思わず「それは本当か」と聞き返しました。あまりにも突然の内容でしたので動転しました。急逝がわかるまでの経過を彼から聞きながら、これは真実なんだという思いに至りました。

3 月 14 日（土）平野さんは知人の結婚式に出席後、研究室出身者と飲み会に出たそうです。3 月 16 日（月）何の連絡もなく研究室に来なかったそうです。普段は休む時には必ず電話かメールを研究室に寄越すのが習慣になっていたのも何かおかしいと感じ、メールで質したのですが返事はなかったそうです。17 日（火）夕方から物質応用化学科の退職者の送別会が開かれるので、それには必ず出席すると思っていたが、無断で欠席したのでこれは大変なことが起きているのではないかと考えたそうです。そこで、結婚して別の場所に住んでいる娘さんに連絡を取り、平野さんの自宅を調べてもらうことにしたのです。

平野さんは約 10 年前に奥様を亡くされ、現在は一人住まいをしていました。両親は筑波に住んでいます。昨年 11 月に父上を亡くし、近いうちに母上と同居して、母親に甘えるんだとも言っていました。私は「お母さんもお年を召しているのだから早く一緒の生活をした方が良いよ」と言った矢先のことでした。もし平野さんの側に誰かいたならば助かったのではないかと今でも思っています。

平野さんは高血圧症などの典型的な成人病患者でした。当然病院通いをしていたのですが、私も高血圧を持っているので二人して日大病院に診察に通ったこともあります。平野さんは煙草飲みでもありました。私は非常勤の講義で大学に行った時、彼に会うと必ずと言ってよいほど煙草をやめたらどうかと忠告したものです。「あなたには年老いた両親もいるし、研究室の将来もあなたの双肩にかかっているのだから健康でいてくれなければ困るんだ。そのためには煙草は止めた方が良い」と。しかし平野さんは「これが私の唯一の趣味だから」と言って止めることはありませんでした。私が平野さんと最後に会ったのは 2 月 27 日でした。その日学士会館での日本エネルギー学会の総会に出席するため途中にある平野研にお昼頃訪ねて行って、20 分くらい話したことが今生の別れになるとは夢にも思いませんでした。

平野さんは平成 13 年 4 月に旧・住友金属工業（株）から私の後含みの助教授として日本大学理工学部へ転職しました。平成 3 年より始まった国家プロジェクトの石炭液化油製造 NEDOL プロセス 150 トン/日パイロットプラント計画に住金から日本コールドオイル（株）に出向し参画しました。平成 9 年から本格的な運転が開始され、液化触媒としての天然パイライトの活用研究に多大の貢献をされたのです。

私も石炭液化研究をしていた関係で平野さんとは国内外の学会の発表会等で一緒になり、またパイロットプラントの見学に学生を連れて行ったときに説明をしてくれたり多くの場面で出会ったものです。彼の人柄や指導力を見込んで日大に来てもらったのですが、当時の物質応用化学科教員で企業出身者は一人もいませんでした。そのため学科に新しい息吹を入れてもらう期待を込めていたのです。

平野さんは期待に応えました。平成 20 年 4 月に教授に就任し、研究室の運営、学生の指導、そして教育、研究に如何なく力を発揮しました。NEDO からは JFE との共同研究「木質バイオマスの直接液化」で多額の予算を獲得したり、廃棄物資源の有効利用などの研究で多くの成果を出してきました。58 歳は若すぎる死でした。これからは真の活躍の本番であった筈です。

私は通夜の席でお棺の中の永遠の眠りについてはいる平野さんの穏やかな顔を拝見しながら「おれより先に逝ったんじゃ駄目だよ」とつぶやきました。涙が止めどなく流れました。今では天国で奥様と再会して今年 2 月に誕生したお孫さんの話などしていることでしょう。

我が家の庭にバラが咲いています。その内の 1 本は平野さんの奥様から 10 数年前に頂いたものです。奥様もバラ愛好家で、さし木をして増やした内の 1 本です。毎年ピンクの可愛い品がある花を咲かせます。平野さんはほとんど興味が無かったのですが、この季節になると、今年も咲いたよと彼に話したものです。これからも大事に育てていきたいと思えます。

合掌

平成 27 年 5 月 6 日

平野勝巳先生を悼む

日本大学理工学部 角田 雄亮

平野先生は私が研究室に配属された年に本学に赴任され、研究室で同じ時間を過ごして参りました。研究はもちろんですが飲み会も全力投球で、「何事も一生懸命やらなければつまらない」という口癖が今も鮮明に蘇ってきます。また、学生が学会で発表する際は必ず一緒に出張し、夜遅くまで発表練習や人生について熱く語っていたことが強く印象に残っています。そのため学生からの信頼は厚く、卒業後も研究室を訪ねてくるOBの人数は他研究室に比べて非常に多くなっています。また、学生に対する教育においては「学生は社会人0年生である」という理念のもと行っておりました。社会に出てから学生自身が困らないようにと願ったもので、学生側からすると少し厳しいと感じることもありますが、OBは口々に「研究室の厳しさがあったから会社で何かあっても耐えられるし、頑張れる」と申しており、後々社会に出てから理解されることも多いようです。平野先生の何事にも一生懸命な所や教育理念について、私はもちろんのこと、これまで卒業していったOB達もそれぞれ引き継いでくれていることと思います。本当に突然のことでまだ混乱の中ですが、本年度から研究室に教員は私一人となりましたが、平野先生最後の教え子達と協力し、今までと変わりに研究室を運営できるよう頑張りたいと思います。心よりご冥福をお祈りします。